重要伝統的建造物群保存地区選定に向け，
伝統的街並みを活かした白峰集落のまちづくり

指導教員：金沢工業大学　環境・建築学部　教授　谷 明彦
参加学生：青柳 怜志・中島 和哉・米島 佳祐・三木 脩平・坪田 彬・藤井 亜紀子・赤野 恵介・
石川 琢巳・大和田 静・出井 隆一郎・中川 雄太・平野 周・宮川 千裕

１．調査研究成果要約

本調査研究は，白山市白峰地区の継続的な地域活性化のために伝統的な街並みを活かし，世界遺産指定へのステップとして重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）選定を視野に入れたまちづくりを行うものであり，街並みや地域の資源発掘・活用によって，地域に活気をもたらすことを目指す。

今年度の大きな成果としては，白峰地区内の空き地を住民の方々や来訪者がくつろげ，尚且つ観光資源と成り得る空間を整備した。

図 1. 街並みの様子

２．調査研究の目的

白山市白峰地区は，豊かな自然と歴史的な街並み，文化，景観など非常に価値ある資源が残る地域である。しかし近年，少子高齢化や過疎化などの問題が深刻化しており，2005 年の白山市への合併による財源優先順位の低下，独自性の喪失など，現状からの更なる衰退が懸念されていた。

本調査研究の目的は，重伝建地区選定を念頭に置き，白峰地区の伝統的な街並みを活かしたまちづくりを行うことであり，継続的な地域活性化の促進を目指すことである。そして，住民の方々が自立的に活動を実施できる場の形成を最終的な目標としている。

この取り組みは，今年で 4 年目を迎える。これまでの活動として，1 年目は，私たちが主体となって行える活動を中心に「古民家の活用」，「景観整備」，「情報発信」の 3 項目から成る『まちづくり活動の３方針』を定め，これを軸に具体的な提案を行い，実行した。その結果，古民家を再活用した「雪だるまカフェ」を住民と協働して立ち上げ，運営を行うなどの成果を上げ，住民の方々から信頼や協力を得ることができた。2 年目は，住民からの信頼や協力を得たことで，長期間を要する白峰地区の知名度向上を目指す活動へと移行していき，全国へ情報を発信できる土台としてホームページやガイドマップの作成などを行った。また，重伝建地区選定の申請に向けて，建物の外観や街並みの景観調査を開始した。3 年目は，これまでの活動を継続させることを目標に，ホームページの更新や重伝建地区選定に向けた調査を行うとともに，調査で得られたデータを報告書としてまとめた。その他，次年度の計画としてカフェの向かいにある空き地を整備するため，住民代表の方々と話し合いを行った。

今年度は景観整備とカフェの充実に重点を置いた活動として，カフェ向かいの空き地整備の企画・実行，カフェの内装や販売品の提案などを行っていく。

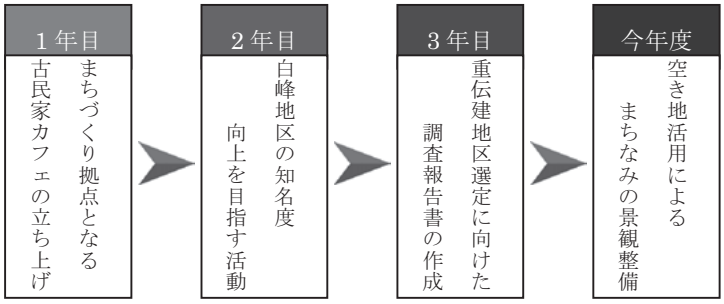

図 2. 活動の流れ

図 3. 雪だるまカフェ

３．調査研究の内容

１）調査研究の手順・方法

本調査研究を以下の手順と方法で行った。

① 文献調査：白峰地区に関わる文献や中山間地の活性化事例調査などを広範に行い，地域特性や資源などの把握を行う。

② 現地調査：地区を歩きながら資料やガイドマップと照らし合わせ，街並みの現状や特徴を把握する。また，整備予定地の幅や面積を調査する。

③ 事例調査：空き地整備の事例調査として，ガーデニングショップやホームセンターなどを実際に見て回り，空き地の整備に活かせるか検討する。

④ ヒアリング調査：空き地の整備方針について，定期的に住民の代表者や専門家と打ち合わせを行うことで，本調査研究の質を向上させていく。

⑤ 来訪者調査：白峰地区で実施されるイベントの際，外部からの来訪者や駐車台数及び，歩行者数などを調査し，アンケートを実施する。

⑥ 内装の改善：雪だるまカフェの内装をより魅力的にするため，模様替えや飾り付け，補修作業などのシミュレーションをした後，行動に移す。

⑦ ライトアップ： イベントの質を向上させるべく，本学で入念な実験を行い，本番のライトアップを実施する。今年度は，照明に約 10 本の番傘を取り入れたり，雪だるま型の照明を試験的に設置したりし，昨年よりも発展したライトアップを目指す。

２）調査研究スケジュール

本調査研究では以下の表に示すスケジュールで調査研究を進めた。

表 1. 調査研究スケジュール

月	調査研究内容
4 月	文献調査，雪だるまカフェの障子張り替え，新聞取材 住民代表・専門家とのカフェ向いの空き地の利用方法についての話し合い
5 月	仮整備されたカフェ向いの空き地の見学，若葉まつり参加
6 月	仮整備された空き地の測量調査，市役所職員と空き地整備に向けた打ち合わせ 空き地整備に向けた事例調査
7 月	空き地整備に向けた事例調査
8 月	住民代表・専門家との空き地整備の打ち合わせ 空き地整備開始，加賀市橋立地区の住人の方々の来訪及び見学会の実施
9 月	空き地整備（雪だるまガーデン）完成，奉納相撲見学 カフェ照明の変更実験，新聞取材
10 月	住民代表と今後の活動に関する打ち合わせ，カフェに新たな看板の設置 カフェ照明の変更，新聞取材，雪だるまガーデン補足作業
11 月	温泉まつり参加，ライトアップイベント実施 雪だるまガーデン補足作業，シンポジウム参加
12 月	カフェお土産展示ブースの改善シミュレーション

４．調査研究の成果

本調査研究では,『まちづくり活動の３方針』に沿って，以下の成果をあげることが出来た。

１）「古民家の活用」による成果

1-1 雪だるまカフェ障子の張り替え

カフェの二階には,長年風雨にさらされてきたため破れてしまった障子がそのまま使用されていた。屋外から見える位置にあり,雪だるまカフェの美観を損ねるため,障子紙よりも丈夫で耐水性のあるワーロンシートを使用して障子の張り替えを行った。

図 4. 障子の張り替え

1-2 照明の変更

カフェの照明器具は一般の家庭で使用されるようなタイプのものであった。しかし，以前からカフェの雰囲気にそぐわないとの声があり,様々な照明器具で試行錯誤した結果,右図のようにレトロな照明器具に変更した。

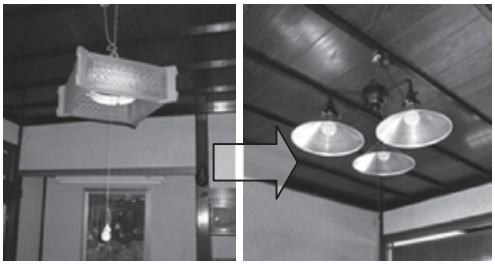

図 5. 照明の変更

1-3 販売スペースのレイアウト変更

カフェの玄関は,お土産用の雪だるまグッズや地元の特産品などを展示･販売するスペースとなっている。今年度は，このスペースをより魅力的な空間にするため，商品棚の飾り付け，新たな雪だるまグッズの開発に取り組んだ。グッズ開発に関しては商品化まで到達出来なかったが,いくつかの試作品を製作できた。

図 6. カフェ玄関

図 7. 試作モビール

２）「景観整備」による成果

2-1 空き地整備の企画

雪だるまカフェの向かいには空き地があり，昨年度からこの敷地の活用方法について，住民代表の方々と話し合いを行ってきた。昨年度の時点で，空き地をオープンカフェとして整備することが決定していたが，具体的なデザインを提案できずにいた。

今年度は４月から７月の間に，オープンカフェのデザインの決定や，使用する材料の見積もりを算出し，８ 月の施工に備えた。

図 8. 空き地

図 9. 打ち合わせ

2-2 雪だるまガーデンの施工

空き地整備の企画を元に，カフェ向かいの空き地を「雪だるまガーデン」として，来訪者や地域住民の方々の休憩所を兼ねたオープンカフェへと整備した。施工にあたっては，地元の専門家に指導していただきながら，約 2 週間かけて本研究室学生が行った。

約 80 ㎡の敷地に雪だるま型に御影石を敷き詰め，それ以外の箇所には雪をイメージした飛び石やタマリュウという植物を植える。その他，利用者が休憩しながら楽しめるよう様々な仕掛けを施す予定である。なお，本計画は段階的に進めていくものとし，最終的な完成は 3～4 年後である。今年度の第 1 期作業は地盤作りとして雪だるま型に御影石を敷き詰め，飛び石やタマリュウを試験的に配置した。

整備後はカフェに入れないペット同伴の来訪者や，ハイキング客が休憩スペースとして利用している。また，整備後に北陸中日新聞の取材を受け，翌日の新聞に掲載していただいた。

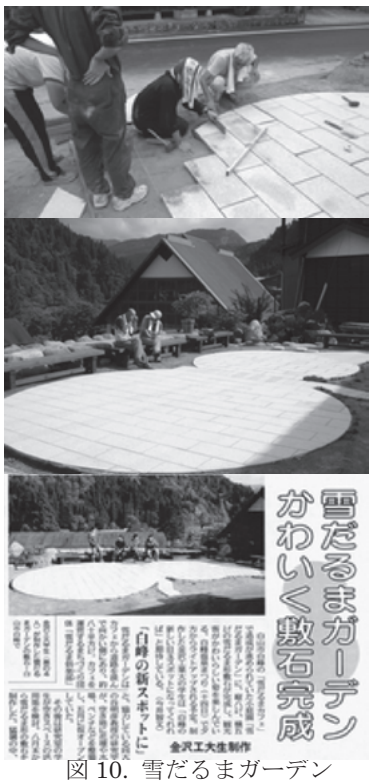

図 10. 雪だるまガーデン
（作業風景・完成後・新聞）

3）「情報発信」による成果

3-1 「白峰雪だるまの里協議会」HP 更新

HP は地区の有志で構成されている「雪だるま倶楽部」の委託を受け，一昨年前に製作したものである。雪だるまカフェを中心として，地区全般の情報発信を行うことを目標としている。今年度は昨年度に引き続き，白峰地区でのイベントや，本研究室が行った白峰地区での活動などを定期的に掲載した。

図 11. ホームページ

3-2 ライトアップイベントの実施

ライトアップイベントは他のイベントと絡めて実施することで，イベント単体で行うよりも観光客の来場を期待できるうえ，イベントを華やかに出来る。本研究室では一昨年前から定期的にライトアップイベントを実施しており，今年度は，11 月 18 日に行われた「温泉まつり」の際に，約 700 本のビンとロウソク，ワーロン紙を使用して白峰地区の街路に明かりを灯した。イベントを実施する数日前からポスターやチラシを作成し，周辺住民や施設へ告知と協力依頼を行った成果もあり，ロウソクの点灯に協力していただける住民も見られた。また，ライトアップイベントに関するアンケートも同時に実施し，約 20 名の方々から回答を得ることが出来た。

イベント及び照明の評価は，非常に良く，「各地で開催して欲しい」，「日数を増やして欲しい」などの意見を頂いた。しかし中には，「広報や放送で宣伝して欲しい（住民）」，「偶然来ていたので見られてラッキーだった（来訪者）」など，宣伝活動が不十分であった

図 12. 当日の様子

ととれる意見も多かった。また，昨年度から新たな照明として和傘を導入しているが，今年度は本数をさらに増やして「雪だるまガーデン」に設置した。和傘照明の評価に関しても非常に良く，後日，写真付きでイベント紹介を北陸中日新聞に掲載していただいた。

手作りキャンドル点灯

白峰温泉まつりで半生ら

図 13. 新聞記事

4）ガイドツアーの実施

4-1 ガイドマニュアルの作成

今後来訪者に白峰を案内する機会が増えると予想される。そのため，案内をする際の資料となるマップやしおりを作成し，今後行われるガイドツアーに備えた。

4-2 加賀市橋立地区の住民の方々の来訪及びガイドツアーの実施

加賀市橋立地区は重伝建に選定されたものの，まちづくりに関してはあまり手が付けられておらず，今後古民家を活動拠点施設として整備し，空き地整備や外部への情報発信を行っていく予定である。その参考事例として，類似の活動を既に行っている白峰地区が選ばれ，9 月に橋立地区住民らからなる「加賀橋立まちなみ保存会」の方々を招き，ガイドツアーを実施した。

図 14. ガイドツアーの様子

5．調査研究に基づく提言

1）住民と行政や大学・企業などが協働でまちづくりを行う際，双方が合意形成し，協力して活動を行わなければならない。しかし中には，行政に任せきりで住民側が受け身なケースや，住民側が望んでいない事を行政が行うケースがある。そういった点でいえば，白峰地区と行政側は良好な関係であるといえる。今後も双方が協力し合って活動していくことが重要である。

2）白峰地区は，他の中山間地域などと比べて日用品店や飲食店が充実している。これはまちづくりを行う上で重要な要素である。しかし，住民が価格や品揃えを重視して郊外で買い物を続ければ，白峰地区の店舗は衰退し，経営破綻を余儀なくされる。そうなれば，郊外まで出かけられない高齢者は生活ができなくなり，買い物難民が産まれる。住民はこの意味を十分に理解し，自分たちの地域を守るためにも，極力地元でお金を落としていくことが重要である。

3）白峰地区の観光客は年々増加しているが，そのほとんどが日帰り客であり，宿泊客は減少している。かつてはスキー場や白山の登山口として民宿や旅館などの宿泊施設が多く存在したが，2008 年にスキー場が競技専用化したことなどにより宿泊客が減少してしまった。これにより，経営者の士気の低下や，営業を取りやめる民宿などが後を絶たず，このままでは宿泊施設の質の低下が懸念される。今後は宿泊施設の質や経営者の士気を向上させることが課題である。

4）現在白峰地区では若者の人口が減少しており，若い労働力の不足が深刻な問題となっている。このままでは 20 年，30 年後には高齢者ばかりの地域になってしまう恐れがあり，今後，若者をいかにして引き寄せ，定住させるかが重要な課題である。また，若い世代の中から次代のリーダーとなる人物を育て，住民のまちづくり意識を途絶えさせないことも重要である。

5）今後さらに実施すべき提案事項

本調査研究では，提案事項のうち，継続して行う活動を向上させるための提案と次年度以降に向けた新たな提案とに分かれている。短期間で行える提案を実行しつつ，長期間を要する提案はじっくりと腰を据えて，実施していきたい。例として，以下のものが挙げられる。

① 雪だるまガーデンに関する提案：前述した通り，雪だるまガーデンの整備は３年計画であり，次年度は敷石以外の部分に取り掛かる予定である。また，その後整備予定であるオブジェやモニュメントなどについても，今後検討していかなければならない。

② 他の空き地に関する提案：今年度は偶然雪だるまカフェの向かいに空き地があったため，雪だるまガーデンを整備したが，白峰地区にはそれ以外の場所にも空き地があるため，今後は他の空き地の利用方針についても提案を行っていく。

③ 雪だるまカフェの内装に関する提案：販売スペースをさらに充実させるため，新たな商品の開発に取り組む。また，展示棚のレイアウトも考え，提案していく。

④ 飲食・宿泊施設の活性化に関する提案：今後飲食・宿泊施設の質を向上させていくために，自分たちで各施設を利用したり，利用者にアンケート調査を行ったりし，各施設を評価して経営者に伝える。利用者からの要望などがあれば，経営者も改善するために行動し，それが施設の質の向上に繋がるのではないか。

⑤ 散策を楽しむための提案：広島県尾道の「猫石」に因んで，白峰地区でも「雪だるま石」を製作し，地区のいたるところに設置する。その他，観光客が白峰地区を散策する際に利用できるレンタサイクルやレンタル傘などを白峰らしいデザインで制作し設置する。

６．調査研究の自己評価

今年度は『まちづくり活動の３方針』の中でも「景観整備」に重点を置き活動を行ってきた。そのおかげで，「雪だるまガーデン」という素晴らしいオープンカフェが完成し，住民の方々や利用者からの評判も上々である。しかしその反面，「古民家の活用」や「情報発信」に関してはあまり目立った成果を上げることが出来なかった。「古民家の活用」に関しては，前年度から計画していたことのほんの一部しか実行することができず，「情報発信」に関しては，昨年度同様のＨＰの更新やライトアップイベントなど，昨年度とあまり代わり映えのしない結果となった。

このように活動を円滑に進められなかった最大の要因は，先輩から後輩への引き継ぎにあったのではないかと感じた。長年行うプロジェクトにおいて，携わる学生が卒業するのは避けられないことである。しかしその際，これまでに得た情報を次の代に確実に引き継いで行かなければ，今年度のように計画通りに活動ができなくなってしまう。先輩から引き継いだ情報，今年度自分たちが得た情報，そして次年度の活動方針をこれから次の代へ確実に伝えることが今後の課題である。

今年度の大きな成果として，「雪だるまガーデン」の第一段階完成があるが，その他にも，住民の方々と親密になれたことが挙げられる。雪だるまガーデン施工の際，カフェに寝泊まりさせて頂いたのだが，住民の方々から差し入れを頂いたり，総湯を住民料金で利用させていただいたりと大変お世話になった。また，雪だるまガーデンの施工後も，白峰地区へ行くたびに「今日は泊っていかないの？」「またいつでも泊まりにおいで」と声をかけていただけるようになり，住民の方々との距離が縮まったと感じた。このように住民と信頼関係を築いていくことは，まちづくりにおいても大変重要であり，距離が縮まればお互いに本音で話しやすくなる。残念なことは一年かけて住民の方々と親しくなれても，卒業とともに新しいメンバーに引き継ぎ，人間関係もいったん白紙に戻ってしまうことだ。来年度の後輩たちにも早く住民の方々から顔を覚えてもらえるようになって欲しい。

今年度でまちづくり拠点（雪だるまガーデン）周辺では十分な成果が得られたが，白峰地区の他の場所に関してはまだまだ課題がある。今後は飲食店や宿泊施設の活性化など，白峰地区全体に亘って活性化に関する取り組みを行っていきたい。